

精選 折口信夫

Ⅱ

文学発生論・物語史論

折口信夫

岡野弘彦 編

慶應義塾大学出版会

精選

折口信夫

Ⅱ

文学発生論・物語史論

目次

凡例	4
国文学の発生（第一稿）呪言と叙事詩と	5
国文学の発生（第二稿）	17
国文学の発生（第四稿）唱導的方面を中心として	62
*	
小説戯曲文学における物語要素	148
日本文学の内容	176
笑ふ民族文学	206

*

日本の創意 源氏物語を知らぬ人々に寄す

236

反省の文学源氏物語

251

ものゝけ其他

264

折口先生と源氏物語の講義

岡野弘彦

272

解題

長谷川政春

280

凡例

- 一 本アンソロジー『精選 折口信夫』は、中央公論社版『折口信夫全集』（一九九五―二〇〇二）を底本とした。
- 二 各著作の末尾に、初出、および発表年月を記した。
- 三 本文校訂にあたって、明らかな誤植はとくに断ることなく修正したが、説明を要する修正箇所については、解題に記した。
- 四 原則として新字体・旧仮名遣いとするが、可能なかぎり底本の用字・用語を尊重した。例外は解題に記した。
- 五 ルビ（ふりがな）は原則としてひらがなとし、難読字には適宜ルビを振った。
- 六 本文中の編集上の註記は「」に入れ、著者による註と区別するため、本文よりも小さな文字で示した。
- 七 本文中に、今日の人権意識に照らして不適切と思われる語句や表現があるが、時代的背景と、作品の歴史的価値にかんがみ、加えて著者が故人であることから、底本のままとした。

国文学の発生（第一稿）

呪言と叙事詩と

一

日本文学が、出発点からして既に、今ある儘の本質と目的を持つて居たと考へるのは、單純な空想である。其ばかりか、極微かな文学意識ごくかすが含まれて居たと見る事さへ、眞実を離れた考へと言はねばならぬ。古代生活の様式として、極めて縁遠い原因から出たものが、次第に目的を展開して、偶然、文学の規範に入つて来たに過ぎないのである。

似た事は、文章の形式の上にもある。散文が、権威ある表現の力を持つて来る時代は、遙かに遅れて居る。散文は、口の上の語としては、使ひ馴らされて居ても、對話以外に、文章として存在の理由がなかつた。記憶の方便と云ふ、大事な要件に不足があつた為である。記録に憑よることの出来ぬ古代の文章が、散文の形をとるのは、時間的持續を考へない、当座用の日常会話の場合だけである。繰り返しの必要のない文章に限られて居た。ところが、古代生活に見えた文章の、繰り返しに憑よつて、成文と同じ効果を持つたものが多いのは、事実である。律文を保存し、發達させた力は、此処

にある。けれども其は単に要求だけであつた。律文發生の原動力と言ふ事は出来ぬ。もつと自然な動機が、律文の發生を促したのである。私は、其を「かみごと」（神語）にあると信じて居る。

今一つ、似た問題がある。抒情詩・叙事詩成立の前後に就てゐる。合理論者は抒情詩の前出を主張する。異性の注意を惹く為とする、極めて自然らしい戀愛動機説である。此考へは、雌雄の色や声と同じ様に、詩歌を見て居る。純生理的に又、原始的に考へる常識論である。其上、發生時に於て既に、ある文学としての目的があつたらしく考へるからの間違ひである。律文の形式が、さうした目的に適する様に、ある進歩を経てから出来て来た目的を、あまり先天的のものに見たのだ。わが国にくり返された口頭の文章の最初は、叙事詩であつたのである。日本民族の間に、国家意識の明らかになりかけた飛鳥朝の頃には、早、万葉に表れたゞけの律文形式は、ある点までの固定を遂げて居た様に見える。

我々の祖先の生活が、此国土の上にはじまつて以後に、なり立つた生活様式のみが、記・紀其他の文献に登録せられて居るとする考へは、誰しも持ち易い事であるが、此は非常に用心がいる。此国の上に集つて来た沢山の種族の、移動前からの持ち伝へが、まじつて居る事は、勿論であらう。併し此点の推論は、全くの蓋然の上に立つのであるから、嚴重にすればする程、科学的な態度に似て、実は却つて空想のわり込む虞れがある。だからある点まで伝説を認めておいて、文献の溯れる限りの古い形と、其から飛躍する推理とを、まづ定めて見よう。

其うちで、ある様式は、今ある文献を超越して、何時・何処で、何種族がはじめて、さうして其を

持ち伝へたのだと言ふ様な第二の蓋然も立てられるのである。さうなつた上で、古代生活の中に、真の此国根生ひと、所謂高天原伝来との交錯状態がはつきりして来るのである。

文章も亦、事情を一つにして居る。叙事詩の發達に就て、焦点を据ゑねばならぬのは、人称の問題である。

土居光知氏は、日本文学の人称問題の發達に、始めて注意を向けた方である。氏と立ち場は別にして居るが、此事は、言ひ添へて置きたい。

日本紀の一部分と、古事記の中、語部の口うつしに近い箇所は、叙事として自然な描写法と思はれる三人称に従うて居る。時々、一人称であるべき抒情部分にすら、三人称の立ち場からの物言ひをまじへて居る。「八千矛ノ神と妻妾との間の唱和」などが其である。此は、叙事詩としてのある程度の進歩を経ると、起り勝ちの錯乱である。ところが間々、文章の地層に、意義の無理解から、伝誦せられ記録せられた時代々々の、人称翻譯に洩れた一人称描写の化石の、包含せられて居る事がある。

一人称式に発想する叙事詩は、神の独り言である。神、人に憑つて、自身の來歴を述べ、種族の歴史・土地の由緒などを陳べる。皆、巫覡の恍惚時の空想には過ぎない。併し、種族の意向の上に立つての空想である。而も種族の記憶の下積みが、突然復活する事もあつた事は、勿論である。

其等の「本縁」を語る文章は、勿論巫覡の口を衝いて出る口語文である。さうして其口は十分な律要素が加つて居た。全体、狂乱時・変態時の心理の表現は、左右相称を保ちながら進む、生活の

根本拍子が急迫するからの、律動なのである。神憑りの際の動作を、正気で居てもくり返す所から、舞踊は生れて来る。此際、神の物語る話は、日常の語とは、様子の変わったものである。神自身から見た一元描写であるから、不自然でも不完全でもあるが、とにかくに発想は一人称に依る様になる。

昂ぶつた内律の現れとして、置語・対句・文意転換などが盛んに行はれる。かうして形をとつて来る口語文は、一時的のものではある。併し、律文であり、叙事詩である事は、疑ふ事が出来ない。此神の自叙伝は、臨時のものとして、過ぎ去る種類のものもあらう。が、種族生活に交渉深いものは、屢くり返されて居る中に固定して来る。此叙事詩の主なもの、伝誦せられる間に、無意識の修辭が加る。口拍子から来る記憶の錯乱もまじる。併しながら「神語」としては、段々完成して来るのである。

文章としての律要素よりも、声楽としての律要素の方が、実は此「神語」の上に、深くはたらしめて居た。律語の体をなさぬ文も、語る上には曲節をつける事が出来る。此曲節に乗つて、幾種類もあつた「神語」が巫覡の口に伝つて、其相当の祭り・儀式などに、常例として使はれて来た。つまりは、団体生活が熟して来て、臨時よりも、習慣を重んずる事になつたからなのだ。

郡ほどの大きな国、邑と言うてもよい位の国々が、国造・県主の祖先に保たれて居た。上代の邑落生活には、邑の意識はあつても、国家を考へる事がなかつた。邑自身が国家で、邑の集団として国家を思うても見なかつた。隣りあふ邑と邑とが利害相容れぬ異族であつた。其と同時に、同族

ながら邑を異にする反撥心が、分岐前の歴史を忘れさせた事もあらう。

かう言ふ邑々むむちの併合の最初に現れた事實は、信仰の習合、宗教の合理的統一である。邑々の間に厳に守られた秘密の信仰の上に、靈験あらたなる異族の神は、次第に、而も自然に、邑落生活の根柢を易へて行つたのである。飛鳥朝以前既に、太陽神を祀る邑の信仰・祭儀などが、段々邑々を一色に整へて行つたであらう。邑落生活には、古くからの神を保つと共に、新に出現する神を仰ぐ心が深かつたのである。

単に太陽神を持つて居た邑ばかりでなく、他の邑々でも、てんでに発生した事實もあらうが、多くはかうして授けられたらうと思はれる一つの様式として、語部かたりべと言ふ職業団体——かきべ——が、段々成立して行つた。

神憑りの時々語られた神語の、種族生活に印象の深いものを語り伝へて居る中に、其伝誦の職が、巫覡の間に分化して來た。さうして世襲職として、奉仕には漸く遠ざかり、詞句の諳誦と曲節の熟練との上に、其が深くなつて行つたものと思はれる。

語部の話は、私の研究の筋を辿つて、雑誌「思想」（大正十三年一月）に公にせられた横山重氏の論文がある。私の持つて居る考へ方は、緻密に伝へられて居る。それを推挙して、私は唯概念を綴る。

神語かみごと即託宣すんはちは、人語じんごを以てもつせられる場合もあるが、任意の神託を待たずに、答へを要望する場合に、神の意思は多く、譬喩ひゆ或は象徵風しやうぎふうに現はれる。そこで「神語」を聞き知る審神者——さには——と言ふ者が出来るのである。

中には人間の問ひに對して、一言を以て答へる、一言主ひとひとめしノ神の様な方法を探るのもあつた。

神の意思表現に用ゐられた簡単な「神語」の様式が、神に對しての設問にも、利用せられる様になつたかと思はれる。

私は「片哥かたうた」と言ふ形が、此から進んだものと考へる。旋頭歌せどうかの不具なる物故ものゆゑと思はれて居る名の片哥は、古くは必かならず、問答態もんたふたいを採る。「神武天皇・大久米命おほくめのみことの問答」・「酒折ノ宮の唱和」などを見ると、旋頭歌發生の意義は知れる。片哥で問ひ、片哥で答へる神事の言語が、一對で完成するものとの意識を深めて、一つ様式となつたのである。併ししか、問答態以前に、神意を宣のるだけの片哥の時代があつた事は、考へねばならぬ。

今日残つて居る片哥・旋頭歌は、形の頗整頓すていどんしたものである。我々の想像以前の時代の、此端的な「神言」は、片哥・旋頭歌には近いだらうが、もつと整はぬものであつたらう。なぜなら、此二つの形は、叙事詩がある發達を遂げた後に、固定した音脚おんきやくをとりこんだものらしく思はれるからである。つまりは自由な短い様式が、段々他の方面で發達して來たものに影響せられて來たのである。

る。時代の音脚法によつて、整理せられたと言つてもよからう。片哥を以て、日本歌謡の原始的な様式と考へ易いが、かうした反省が大事である。

けれども我々の立場からは、複雑の單純化せられ、雑多が統一せられて行く事實を忘れてはならない。旋頭歌が、一つの詩形——文学意識は少いが——と考へられて来ると、形の上にこそ本句と末句との間に、必休息点かならずは置いて、思想の上では一貫したものになつて来る。本末のある句をくり返して、調を整へるのも、他の詩形の影響である。

私は叙事詩の発生と時を同じくして片哥が出来たと考へ、神の自叙伝としての原始叙事詩と、神の意思表現手段としての片哥と対立させて、推論を進めて来たが、其にしても、此音脚の上に整理の積んだ形は、可なり叙事詩時代の進んだ後、其洗煉せられた様式をとり入れたものと思はれない。

三

種族の歴史は、歴史として伝へられて来たのではない。或過程あるを経た後「神言」によつて知つたのである。其すら、神の自ら、如何に信仰せられて然るべきかを説く為の、自叙伝の分化したものであつた。祭祀を主とせぬ語部が出来ても、神を離れては意味がなかつた。単に、史籍の現れるまでの間を、口語に繋ぎ止めた古老の遺伝ではなかつたのである。信仰を外にしては、此大儀で亦空虚またにも見える為事の為の、部曲かきべの存在をば、邑落生活の上の必須条件とする様になつた筋道がわから

ない。其に又人間の考へ通り自由に、其詞曲を作る事が許されて居たのなら、子代部・名代部の民を立てる様な方法は採らなかつたであらう。

国と称する邑々が、国名を廃して郡で呼ばれる様になつても、邑の人々は、尚、国の音覺に執着した。私に国を名のり、又は郡を忌避して、県を称して居た。其領主なる国造等は、郡領と呼び易へる事になつても、なほ名義だけは、国造を称へて居たのが、後世までもある。けれども、さうした国造家は、神主として残つたものに限つて居る。邑々の豪族は、神に事へる事によつて、民に臨む力を持つて居た。其国造が、段々神に事へる事から遠ざかつて、尚、神主として、邑の大事の神事に洩れる事が出来なかつた。さういふ邑々を一統した邑が、我々の倭朝廷であつたのである。

一つの邑の生活が、次第に成長して、一国となり、更に、数国数十个国家の上に、国家を形づくる事になつた。こんな今まで、所謂国造生活が抜つても、やはり他の邑の国造とおなじく、神事を棄てゝ了ふ訣にはいかなかつた。今もさうである様にある時期には、神主としての生活が、繰り返されねばならなかつた。古い邑々の習慣が、祖先礼拝の觀念に結びついて、現に、宮中には残つて居るのである。さうした邑々の信仰が、一つの邑の宗教系統に這入つて来る様になる。倭朝廷の下なる邑として、単なる、豪族となつても、邑々時代の生活は易へなかつた。殊に經濟組織に到つては、豪族として存在の意義が其処に繫つて居るのだから、革まることはなくて續いて居た。難波朝廷(孝德)から半永久的に行はれた政策の中心は、此生活を易へさせる事であつた。此がほゞ根本的

に改つて来たのは、平安朝に入つて後の話である。

邑と豪族とを放し、神と豪族との間を裂くと言ふ理想が実現せられて、豪族生活が官吏生活に變つて了うても、元の邑の自給自足の生活は、容易に替らなかつたのである。

邑々に於ける国造は、自分の家の生活を保つ為に、いろんな職業団体——かきべの民——を設けて、家職制度を定めて居た。奈良朝になつてからではあるが、才能の模様では、所屬以外の部曲に移した例はある。朝妻ノ手人である工匠が、語部に替る事を認可せられた（続紀養老三）のは、社会組織が變つた為ばかりでなく、部曲制度が、わりに固定して居なかつた事を見せて居るのであらう。

朝妻ノ手人から語部に替ると言ふのは、声樂の才を採用したものであらう。其外そのほかに尚血統の上の關係があるかも知れぬ。唯、諳記力の優れて居たのだらうと言ふ想像は、語部の叙事詩をとり扱うた方法に、理解がないからである。稗田ノ阿礼ひえだ あれが古事記の基礎になつて居る叙事詩を諳誦したと言ふのも、驚くに当らぬことである。

語部の諳誦した文章は、散文ではなかつたのである。曲節を伴うた律文であつたのだから、幾篇かの叙事詩も容易に諳誦する事が出来たはずである。邑々の語部が、段々保護者たる豪族と離れねばならぬ時勢に向うて来る。豪族が土地から別れる様になるまでは、邑々の語部は、尚存在の意味があつたのである。神と家と土地との關係が、語部の叙事詩を語る目的であつた。家に離れ神に離れた語部の中には、土地にも別れねばならぬ時に出くはした者もある様である。自ら新様式の生活法

を扱んだ一部の者の外は、平安朝に入つても、尚旧時代の生活を続けて居た事と思はれる。

日本歌謡のおほざつばな分類の目安は、うたひ物・語り物の二つの型である。叙事風で、旋律の単調な場合が「かたる」であり、抒情式に、変化に富んだ旋律を持った時が「うたふ」である。此分類は、長い歴史ある、用語例である。物語と言ふ語も、後には歴史・小説など、意義は岐れて来たが、単に、会話の意味ではない。此亦古くからある語で、語部の「語りしろ」即叙事詩の事なのである。

語部の曲節に、音楽として、さほどの価値があつたらうとは考へられない。けれども、出発点から遠ざかつて固定を遂げる間に、若干の芸術意識は出て来た事と思はれる。文字や史書が出た為に、語部が亡びたとは言へない。真の原因としては、保護者を失うた外的原因のほかに、芸術的内容が、時代とそぐはないものになつたと言ふ事が考へられる。語部の物語が段々、神殿から世間へ出て来た時代が思はれる。家庭に入つて諷諭詩風な効果を得ようとした事も、推論が出来る。一族の集會に、家の祖先の物語として、血族の間に伝る神秘の記憶や、英邁な生活に対する憧憬を新にした場合なども、考へることが出来る。神との関係が一部分だけ截り放されて、芸術としての第一歩が踏み出されるのであつた。書物の記載を信じれば、藤原朝に既に語部が、邑・家・土地から游離して、漂泊伶人としての職業が、分化して居た様に見える。

落伍した神人は、呪術・祝言其他の方便で、口を養ふ事は出来る。かうして、家職としての存在の価値を認めない、よその邑・国を流浪してゆくとなると、神に對しての叙事詩と言ふ敬虔な念は失

はれて、興味を惹く事ばかりを考へる。神事としての墮落は、同時に、芸術としての解放のはじめである。かう言ふ人々が、奈良から平安になつても、幾度となく浮浪人の扱ひは受けないで、田舎わたらひをした事と思ふ。併し、今一方呪言系統の文芸の側にも、かうした職業の發達して来る種はあるのである。

神言に今一つの方面がある。神が時を定めて、邑々に降つて、邑の一年の生産を祝福する語を述べ、家々を訪れて其家人の生命・住宅・生産の祝言を聞かせるのが常である。此は、神の降臨を学ぶ原始的な演劇に過ぎない。

以前、私の考へは、呪言と叙事詩とを全く別な成立を持つものとしての組織を立てゝ居た。其は生産其他を祝福しに来る神の託宣と、下の事実とを関聯させないで居た爲であつた。

生命・生産を祝福する神の語が、生産物に影響を与へると言ふ觀念が、一転して人間の言語で、祝福しようとする形式をとつて来るのである。

近世まであり、現にありもするほかひ・ものよし・万歳などは、神降臨の思想と、人のした祝言の變形である。

万歳の春の初めの祝言は、柱を褒め、庭を讃へ、井戸を讃美する。其讃美の語に、屋敷内の神たちをあやからせ、かまけさせようと言ふ信仰から出てゐる。単に現状の讃美でない。ほむ・ほぐと言ふ語は予祝する意味の語で、未来に対する賞讃である。その語にかぶれて、精霊たちがよい結果を表すものと言ふ考へに立つて居る。言語によつて、精霊を感染させようとする呪術である。その上

に言語其物にも精霊の存在して居るものと信じて居た。「言靈さきはふ」と言ふ語は、言語精霊が能動的に靈力を發揮することを言ふ。言語精霊は、意義どほりの結果を齎すものではあるが、他の精霊を征服するのではない。伝来正しき「神言」の威力と、其詞句の精霊の活動とに信賴すると言ふ二様の考へが重つて来て居る様である。

呪言は古く、よごとと言うた。奈良朝の書物にも、「吉事・吉言」など書いて居るのは基本義を忘れて、縁起よい詞など言ふに近い内容を持つて来たのであらう。寿詞と書いて居るのは、ほぐの義から宛てたのではなく、長寿を予祝する「齡言」の意味を見せて居るのだ。併し、それよりも更に古くは「穀言」の意に感じて居、眞の語原でもあつたらしい。世が「農作の状態」を意味することは、近世にも例がある。古くは穀物をよと言うたのである。即、農産を祝ぐ詞と言ふ考へから出たらしい。

国文学の発生（第二稿）

呪言の展開

一 神の嫁

国家意識の現れた頃は既に、日本の巫女道では大体に於て、神主は高級巫女の近親であつた。併し、其は我々の想像の領分の事で、而も、歴史に見えより新しい時代にも、尚村々・国々の主権者と認められた巫女が多かつた。

神功皇后は、其である。上古に女帝の多いのも、此理由が力を持つて居るのであらう。男性の主権者と考へられて来た人々の中に、実は巫女の生活をした女性もあつたのではなからうか。此点に就ての、詳論は憚りが多い。神功皇后と一つに考へられ易い魏書の卑弥呼の如きも、其巫女としての呪術能力が此女性を北九州の一國主としての位置を保たして居たのであつた。

村々の高級巫女たちは、独身を原則とした。其は神の嫁として、進められたものであつたからだ。神祭りの際、群衆の男女が、恍惚の状態になつて、雑婚に陥る根本の考へは、一人々々の男を通じ

て、神が出現してゐるのである。

奈良朝の都人の間に、踏歌化して行はれた歌垣は、実は別物であるが、其遺風の後世まで伝つたと見える歌垣・嬬歌会（東国）の外に、住吉の「小集会」と言うたのも此だとするのが定論である。

だから、現神なる神主が、神の嫁なる下級の巫女を率寝る事が普通にあつたらしい。平安朝に入つても、地方の古い社には、其風があつた。

出雲・宗像の国造——古く禁ぜられた国造の名を、尚称しては居たが、神主としての由緒を示すに止まつて、政權からは離れてゐた——が、采女を犯す事を禁じた（類聚三代格）のは、奈良朝以前の村々の神主の生活を窺はせるものである。采女は、天子の為の食饌を司るもの、とばかり考へられてゐるが、実は、神及び現神に事へる下級巫女である。

国々の郡司の娘が、宮廷の采女に徴発せられ、宮仕へ果てゝ国に還ることになつてゐるのは、村々の国造（郡司の前身）の祀る神に事へる娘を、倭人の神に事へさせ、信仰習合・祭儀統一の実を、其旧領土なる郡々に伝へさせようと言ふ目的があつたものと推定することは出来る。現神が采女を率寝ることは、神としてゞ、人としてゞはなかつた。日本の人身御供の伝説が、いくらかの種があつたと見れば、此側から神に進められる女（喰はれるものでなく）を考へることが出来る。

その為、采女の嬪・夫人となつた例は、存外文献に伝へが少い。允恭紀の「うねめはや。みゝは

や」と三山^{さんざん}を偲^{おも}ふ歌を作つて采女^{うねめ}を犯した疑ひをうけた韓人^{からひと}の話（日本紀）も、此神の嫁を盗んだ者としての咎^{とが}めと考へるべきものであらう。此事が、日本に於ける初夜権の実在と、其理由とを示して居る。出雲・宗像への三代格の文は、宮廷にばかり古風は存して居ても、民間には、神と現神とをひき離さうとする合理政策でもあり、文化施設でもあつたのだ。

地物^{ちぶつ}の精霊の上に、大空^{おおぞら}或は海^{うみ}のあなたより来る神が考へられて来ると、高下の区別が、神々の上にもつけられる。遠くより来り臨む神は、多くの場合、村々の信仰の中心になつて来る。「杖代^{つゑしろ}」とも言ふ嫁の進められる神は、此側に多かつた様である。時を定めて来る神は、稀々^{まれまれ}にしか見えぬにしても、さうした巫女が定められて居た。常例の神祭りに、神に扮して来る者の為にも、神の嫁としての為事^{しごと}は、変りがなかつた。此は、村の祭り・家の祭りに通じて行はれた事と思はれる。

二 まれびと

新築^{むろ}の室^{むろ}ほぎに招いた正客^{しやうきやく}は、異常に尊びかしづかれたものである。

新室^{にひむろ}を踏静子^{ふみしづこ}が手玉鳴らすも。玉の如^{たまごと}照りたる君を 内にとまをせ（万葉卷十一旋頭歌）

と言ふのは、舞人^{まいびと}の舞ふ間を表に立つ正客のある事を示して居るのであらう。家々を訪れた神の梯^{おもかけ}が見えるではないか。

新室の壁草刈りに、いまし給^{たま}はね。草の如よりあふ処女^{をとめ}は、君がまにく（万葉卷十一旋頭歌）

は、たゞの酒宴の座興ではない。室ほぎの正客に、舞媛の身を任せた旧慣の、稍崩れ出した頃に来たものなる事が思はれる。

允恭天皇が、皇后の室ほぎに臨まれた際、舞人であつた其妹衣通媛を、進め没つて居た姉君に強要せられた伝へ（日本紀）がある。嫉み深い皇后すら、其を拒めなかつたと言ふ風な伝へは、根強い民間伝承を根としてゐるのである。

来目部ノ小楯が、縮見ノ細目の新室に招かれた時、舞人として舞ふ事を、億計王の尻ごみしたのも、此側から見るべきであらう。神とも尊ばれた室ほぎの正客が弘計王の歌詞を聞いて、急に座をすべると言ふ点も、此をかしみを加へて考へねばなるまい。

まれびとなる語が、実は深い内容を持つて居るのである。室ほぎに来る正客は稀に訪ふ神の身替りと考へられて居たのである。恐らくは、正客が、呪言を唱へて後、迎へられて宴の座に直つたものであらう。今も、沖繩の田舎では、建築は、昼は人づくり、夜は神造ると信じて居る。棟あげの当日は、神、家の中に降つて鉦を鳴し、柱牀などを叩き立てる。其音が、屋敷外に平伏して居る家人の耳には、聞えると言ふ。勿論、巫女たちのする事なのである。

八重山諸島では、村の祭りや、家々の祭りに臨む神人・神事役は、顔其他を芭蕉や、蒲葵の葉で包んで、目ばかり出し、神の声色や身ぶりを使うて、神の叙事詩に連れて躍る。村の祭場での行事なのである。又、家の戸口に立つては、呪言を唱へて此から後の祝福をする。大地の底の底から、年に一度の成年式に臨む巨人の神、海のあなたの浄土まやの地から、農作を祝福に来る穀物の神、孟